

# 我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

## ◎ 第一二話 祖父定助の商売と息子達

朝鮮半島の唐辛子を大量に買い付けて、大阪の市場で売ると言うのは、言うは易くして行うは難い事業である。

当時の朝鮮半島は日本統治下にあったから、日本語で買い付けはできたろうが、実際に買い付けネットワークを創り上げるのは至難の業である。そして、相場を窺いながら、機を見て船の手配をし、荷積みをして対馬海峡を渡り、瀬戸内海を突っ切って、大阪の港に乗り入れる。そうして、大阪の干物問屋と値の交渉をして売却する。

うまくゆけば、儲けは莫大だが、下手をすれば大損を蒙る。一回一回が大博打のような商売だ。

しかも、祖父定助は、その一切を一人で仕切ったのだ。塩田定助個人商店には番頭も手代もいなかった。

しかし、祖父の事業は軌道に乗っていった。その間、稔、晋三、良作と男の子がたて続けに生まれ、

塩田家の未来は前途洋々たるものがあつた。定助は子供達を愛した。商売の一サイクルを終えると、

詫間に戻り、その間は毎晩息子達を一人一人、風呂場で自らの手で体を洗ってやるのを常とした。

とはいえ、自分の子とはいえ、お気に入りというものはあるものだ。

祖父定助の一番のお気に入りには次男の俊輔叔父だ。何せ、明るく快活だ。一緒に汽車に乗っても、歌を口ずさんだり、かと思えば、「お父さん、お父さん、お父さん」と言っにぎやかに話しかけてくる。祖父は行く行くはこの子を後継ぎにと考えていたようだ。

それに比べると、父正は祖父の受けはあまり芳しくなかつたようだ。学校の勉強は抜群（とりわけ、算数は得

意中の得意だ）にできたが、何しろ内向的な子で、何か辛いこと、悲しいことがあつてもシクシク泣いているばかり。祖母が「どしたんな。何があつたんな？」と聞いても、心に秘めていつかなしやべろうとしない。

だが、人の世はうまくできたもので、このメソ助が曾祖母コヲにはカワイくてならない。曾祖母コヲが、孫の中で一番愛してやまなかつたのが、父正だ。

そして後に、父に対する曾祖母コヲの寵愛のおこぼれに私も与ることになる。



我が一族の菩提寺吉祥院。仁尾の真言六寺院の1つである